様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０６６７

研究課題名（和文）ドイツ語教育におけるツール活用型プロジェクト授業モデル開発と戦略的評価方法の構築

研究課題名（英文）PBL Development using Database Tools and Strategic Evaluation in German Language Classes

研究代表者
田原　憲和（Tahara, Norikazu）

立命館大学・法学部・准教授

研究者番号：８０４６４５９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本課題においては、ドイツ語授業にどのような形でプロジェクト授業を導入することができるのか、その際の評価方法をどうするのかという点について研究と実践を重ねてきた。その結果、評価の観点と到達目標を明示したルーブリック評価法を導入することが重要であるという結論に達した。その際、授業そのものの目標と授業内プロジェクトの目標を一致させることが、より効果的なプロジェクト授業のために重要であることも判明した。

研究成果の概要（英文）：We held some practices and studies to determinate how we can introduce PBL into German classes and how we should evaluate each student in those class. Our conclusion is that the introduction of a rubric which specifies criteria for evaluation and sets goals of projects should be implemented. In this case, it is very important for effective PBL that we make the target of classes correspond with our PBL goals.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者らによる日本独文学会 2012 年度春期研究発表会ブース発表「「学びを学ぶ」ドイツ語授業を目指して―自律学習を促す３つの授業案」での報告が基礎となっている。ここで研究代表者らはプロジェクト授業を始めとする授業案を提示し、ドイツ語授業における自律学習促進の方策を議論した。また、研究代表者が研究分担者として参加している平成 24～26 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「データベースソフトを活用した初修外国語授業における教材提示の円滑化と授業の活性化」では、授業の補助ツールとしてデータベースソフトウェアを活用した教材提示ツール（以下、「ツール」とする）を開発しており、一部は授業にも導入されている。

プロジェクト授業における成績評価については齊藤・田原(2012)でその限界について指摘されているものの、これについては喫緊の課題として検討を継続して行っている。一方で、田原・池谷・齊藤・神谷(2013)で示すように、ツール活用型授業についてはこれまでの予備的調査及び授業実践においてその有効性が経験的及び実証的に明示されている。

２．研究の目的

本研究課題は、研究代表者らがこれまでに取り組んできた種々のプロジェクトや実践経験に基づき、諸言語の学習ツールの開発経験のある教員の協力も仰ぎつつ、初修外国語であるドイツ語の授業において有効な新規性の高いプロジェクト授業の手法を開発し、ルーブリック法による公平かつ明確な評価方法の提案を行うことで、ドイツ語教育におけるプロジェクト授業普及の先導的役割を担うことを目的とする研究プロジェクトである。

初修外国語の授業においてはこれまでプロジェクト授業が組織的に行われることはほとんどなく、意欲的な一部の教員が自らの裁量内で授業に導入するのみである。一般的に初修外国語の授業においては既習知識の限界もあってプロジェクトそのものが小規模にとどまらざるを得ないことも多い。しかしながら、プロジェクト授業は学習者の自律学習を促進させるためには非常に有効である。自律学習を行う土壌を形成させることで、当該外国語の授業のみならず大学における「学び」そのものが充実し、学ぶことに対する意欲やモチベーションを高めることが可能である。しかしながら上記のような理由によりこれまで初修外国語授業においては大規模なプロジェクト授業がほとんど行われてこなかったのが現状であり、これを改善していくことが大学での学びを充実させる第一歩である。

本研究課題においては自律学習を促進させるための携帯情報端末向けツールを活用したプロジェクト授業のモデルを新たに開発する。これまでに各教員がそれぞれの方法でプロジェクト授業及びツール活用型授業の研究と実践を行い、経験を積み重ねてきた。これまでの研究および実践で培った理論と経験に基づき、プロジェクト授業遂行の際に生じる問題点やプロジェクト授業そのものの限界について徹底的に検討し、これらを改善していくことで、プロジェクト授業の新たな仕組みを段階的に創出していく。

また、プロジェクト授業を組織的に行う際、どのようにして評価基準を設けるかという重要かつ根本的な問題がある。従来、プロジェクト授業の評価基準は明確に示されておらず、数値化されにくい。各教員が学習者の貢献度や積極性などについて総合的に評価することが多く、基準は曖昧なまま残されていることが多い。この評価方法に関する点がプロジェクト授業のアキレス腱ともいえる弱点である。成績評価に教員の主観が大きく関わることは避けられず、公平性の観点からみても組織的にプロジェクト授業を導入することは難しい。本研究課題ではプロジェクト授業における評価方法の明確化を最重要課題と位置づけている。この問題を解決するためにルーブリック評価法を新たに導入し、実践と検討を重ねることで、この課題に対して意欲的かつ挑戦的に取り組んでいきたいと考えている。

３．研究の方法

プロジェクト授業について、研究代表者及び研究協力者が連携し、各自の理論的・経験的知識を基に高度に戦略的なプロジェクト授業の素案を作成し、部分的にこれを授業に導入する。併せて、授業の枠組みと併せてルーブリック評価法に基づく評価方法を設計する。具体的なプロジェクト授業のプランとしては、ツールを活用した授業外学習の成果が直接的に授業内学習に有益に機能し、授業内学習が授業外学習の促進を誘引するというものであり、検討の余地はあるものの SNS の活用も射程に入ってくる。プロジェクト授業導入に際しては、明確な学習の指針を提示するためにも、具体的な到達目標をシラバス上で提示する必要があり、また、その目標を達成するために必要な各要素についての到達度をあらかじめ具体的に設定しなければならない。そのために明確で熟慮されたルーブリック評価法に基づく評価方法を開発する。

平成２５年度上半期には、試験的に１授業時間内におけるミニ評価をルーブリック評価法に基づいて行う。これを複数のクラスで行うことで、ルーブリック評価法の利点や留意すべき点について経験を蓄積する。平成２５年度下半期にはいくつかの授業において、通常の評価方法に加えルーブリック評価法による（裏の・仮の）評価を併せて行い、それぞれの評価方法による成績のズレを検証

することで、新たな評価方法の設計及びその導入に際しての留意点を検討する。

また、自らの授業内で実践と検討を重ねるだけではなく、プロジェクト授業及び評価方法の事例を集め、併せて検証する。事例収集は各学会・研究会の口頭発表や論文集、報告書によるものが中心となるが、各大学や初・中等教育機関の授業視察も積極的に行う。具体的には、慶応義塾大学や大阪大学などを計画している。

ツール開発の面では、これまでに研究分担者が開発・運用している英語学習のためのi0S 用単語学習ツールを基にドイツ語学習用ツールを開発する。開発経験のある研究分担者が中心となり、研究代表者及び研究協力者らがドイツ語教育の面からツール設計を検討し、専門的な観点から意見提供を行う。また、ツールで使用するドイツ語データベースの作成に着手する。データベースは将来的に無料公開する計画であるので、データベース作成にあたっては著作権に留意する必要がある。例文等も慎重に検証していく必要があるため、当初はツール作動確認を主たる目的とする簡素なものする。

平成２５年度末までに、次年度に実施するプロジェクト授業の概要と到達目標、評価方法の詳細を詰め、次年度からの確実な運用を目指す。また、教育系あるいはドイツ学系の学会や研究会でこれまでの中間報告を行う準備を開始する。中間報告は個人及びグループによる口頭発表が中心となるが、一般報告のみならず（独占的に１教室を長時間使用可能な）ブース発表も視野に入れる。併せて、外部から広く意見を得るためにも、実践報告や研究ノートのカテゴリで各種媒体への投稿も行う。

平成２５年度までに設計したプロジェクト授業と評価方法を実際の授業に本格的に導入・実践するとともに、i0S 用学習ツールのデータベースを充実させ、一般公開に向けた準備を進める。前年度までの研究と実践に基づき各学会や研究会で口頭発表を行い、それに併せてツールの紹介と公開に向けた案内を行う。平成２６年度末を目処にツールの公開用データベースを完成させ、平成２７年度には設計した授業プランや評価方法とともに一般公開を行い、無料配布していく。

データベースに関しては授業内学習の延長の範囲内で理解力と応用力をつけるという目的を果たすため、授業で用いる教科書あるいは配布プリントに合わせて設計する。データベース作成にあたっては必要に応じてネイティブチェックを実施する。

平成２６年度からプロジェクト授業を展開していくが、評価方法が適正であるかどうかについては随時チェックと修正が必要であるため、総括的な検討会を平成２６年度前期授業終了後および後期授業終了後に行う。また、中間的な検討会は１ヶ月に１回程度開催し、細かな問題点や再検討の必要性がある部分については随時修正する体制を整える。

本研究課題の完成年度である平成２７年度は、平成２６年度までの経験と実践に基づき更に充実したプロジェクト授業を展開するとともに、本研究課題にかかる教育実践事例の集約完了に向けての作業を行う。各種媒体にて研究・実践の成果を公開していくとともに、日本独文学会での大規模なシンポジウムあるいはワークショップ開催を視野に理論と実践を蓄積していく。

また、本研究課題全体の総括のために科研費の成果報告書を取りまとめるとともに、それとは別にこれまでの口頭発表の内容や実践報告・論文などで公開した各種事例などを最終報告書として編集し、冊子及び電子媒体として無料配布する。

４．研究成果

平成 25 年から 27 年までの 3 年間で行ってきた研究成果をもとに、ルーブリック評価およびそれに基づく評価の妥当性についての分析および懸賞を行った。その過程で、そもそもプロジェクト授業をどのように評価するのかという方法論について、また、自律学習に基づくプロジェクト授業のあり方そのものについての検証も行った。これらの一連の研究および分析は、現在広く浸透しつつあるプロジェクト授業の妥当性について、経験的および学術的にそれを根拠づけるものであるといえる。外国語領域におけるプロジェクト授業についてのこれまでの実践の多くは英語に関するものであったが、本研究が初修外国語であるドイツ語でこのような分析と実践を行ったことで、プロジェクト授業の妥当性がより明確になったものと考えている。

本研究に際してデータベース型ツールを活用するという計画も立案していたが、この点については十分な実践を行うことができなかった。しかしながら、多様な方法で研究代表者、研究分担者および研究協力者がプロジェクト授業を実践し、そのデータを集積したことで、当初計画していた研究の大部分を達成することができた。今回の研究において未実践であるこれらの領域については、今後の研究において引き続きこれを遂行していくとともに、今回の研究で得られた成果をさらに発展させていく計画である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）

① 田原憲和　「ドイツ語授業における「めやす」概念を活用した「つながり」の学習効果の考察」、『立命館高等教育研究』、第 15 号、85-99 頁、立命館大学教育開発推進機構、2015 年。査読有り。

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/ac/itl/outline/kiyo/kiyo15/06_tahara.pdf

② 池谷尚美・齊藤公輔・田原憲和 他 2 名「「学びを学ぶ」ドイツ語授業を目指して - 学習者に授業への積極的参加を促す実践例 - 」『ドイツ語教育』第 18 号、69-74 頁、日本独文学会ドイツ語教育部会、2014 年。査読有り。

〔学会発表〕（計　15　件）

① 田原憲和　「文法項目定着を目的とした能動的学習活動」言語教育エキスポ2016、早稲田大学（東京都新宿区）、2016年3月6日。
② 田原憲和　「ドイツの街紹介プロジェクト - 限定された分量でいかに効果的で魅力的な報告をするか - 」外国語授業実践フォーラム第11回会合、九州産業大学（福岡県福岡市）2016年1月10日。
③ 齊藤公輔　「プロジェクト授業における目標設定の方策 - 目標分解シート導入の試みを中心に -」外国語授業実践フォーラム第11回会合、九州産業大学（福岡県福岡市）、2016年1月10日。
④ 齊藤公輔・田原憲和　「ルーブリック評価を導入したプロジェクト授業の実践例と課題」 日本独文学会2015年秋季研究発表会、鹿児島大学（鹿児島県鹿児島市）、2015年10月3日。
⑤ 田原憲和　「文法事項の「気づき」と「発見」～iPadのプチ導入事例」 外国語授業実践フォーラム第９回会合、東京外国語大学本郷サテライト（東京都文京区）、2015年4月19日。
⑥ 神谷健一　「GK-FIRESでやってきたこと、そしてこれから」言語教育エキスポ2015、早稲田大学（東京都新宿区）、2015年3月15日。
⑦ 齊藤公輔、池谷尚美、田原憲和、神谷健一、「あるルーブリック評価の問題点と改善案」言語教育エキスポ2015、早稲田大学（東京都新宿区）、2015年3月15日。
⑧ 田原憲和　「文法授業でのプロジェクト型学習実践の試み」 言語教育エキスポ2015、早稲田大学（東京都新宿区）、2015年3月15日。
⑨ Kenichi Kamiya, Norikazu Tahara, Naomi Ikeya, Kosuke Saito, et al. "Development and Practice of Multi-Purpose-Use Database Software for Language Classes", ASIACALL 2014. 彰化市（台湾）、2014年11月23日。
⑩ 田原憲和　「世界と「つながる」ための動画作成プロジェクト」 言語教育エキスポ2014、早稲田大学（東京都新宿区）2014年3月9日。
⑪ Kenichi Kamiya, Norikazu Tahara, Naomi Ikeya, et al. "Development and Practice of Conjugation Presentation Tools for European Languages", WorldCALL 2013. グラスゴー（イギリス）、2013年7月12日。
⑫ 齊藤公輔・田原憲和・池谷尚美・神谷健一「データベースソフトウェアを活用したドイツ語教材の可能性と実践例」 日本独文学会2013年秋季研究発表会、北海道大学（北海道札幌市）、2013年9月29日。

〔図書〕（計　1　件）

① 田原憲和、齊藤公輔、鈴木智、神谷健一『プロジェクト授業の設計と運営−ドイツ語教育の現場から−』大阪公立大学出版会、2016年、69 ページ。

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
田原 憲和（Tahara, Norikazu）
立命館大学 法学部 准教授
研究者番号：80464593

(2)研究分担者
齊藤 公輔（Saito, Kosuke）
中京大学 国際教養学部 准教授
研究者番号：90532648

神谷 健一（Kamiya, Kenichi）
大阪工業大学 知的財産学部 講師
研究者番号：50388352

(3)研究協力者
鈴木智（Suzuki, Tomo）
甲南大学 非常勤講師

池谷 尚美（Ikeya, Naomi）
首都大学東京 非常勤講師